

マレーシアを旅するのは二度目である。一度目は 1984 年だから、もう 30 年近く前のことである。マレーシア半島のタマン・ネガラ原生林やボルネオ島のキナバル山を研修した。このときも谷川明男さんと一緒に、ふたりでクモを探して歩いており、私は色彩の派手なアシナガグモの一種や地味なミツカドオニグモの印象を本に書いている(池田, 1989)。いろいろな生物に関心があったため、現地で購入した本も植物、動物、淡水魚、ミジンコ、甲虫、チョウと多岐にわたっていた。クアラ・ルンプールの歴史の本も購入していた。東京蜘蛛談話会の発起人だった萱嶋泉氏が戦争中にクアラ・ルンプールの博物館に在籍していたこともあって、歴史にも興味があったのだ。

しかし、1984 年当時のマレーシアはどんな国だったのかと聞かれると、ほとんど何も思いつけない。自然や生き物ばかり見ていて、社会やヒトをまったく見ていなかったのだ。今回は多少、社会のことも記録しておこう。

悪路を四輪駆動車が走る

日本の高速道路は有料だが、外国の高速道路はたいてい無料である。ボルネオのパン・ボルネオ・ハイウェイも例外ではない。そして、サラワク州の高速道路はあまり整備されていないそうだが、サバ州はかなり整備されていた(2005 年の統計ではサラワク州の 6,471 km に対し、サバ州は 16,091km)。もともとサバ州は英国領の北ボルネオ政府の時代から federal road、いわゆる国道建設が始まり、道路ナンバーも A1 から付けられている。マレーシア半島の国道建設は北ボルネオよりも遅れたし、サラワク州での建設はもっと後だったのである。

しかし、今 2011 年、ケニンガウ市からマリアウ・ベイシン保全地域へ向かう道路は途中で舗装が切れていた。そこまでは国道兼高速道路という様態の二車線ないしは四車線道路だったが、未舗装の二車線道路(ときには四車線以上)となった。そして、さすがの四輪駆動車もバウンドする悪路になった。私の座った後部座席左側からは運転席の速度計がよく見えたが、運転手は時速 80km でこの悪路を突っ走るのだった。

未舗装道路を高速で走った経験といえば、オーストラリア海外研修である(1992 年)。現地のガイドは、私たちがマグネチック・ターマイト(シロアリ)の巣が見たいと言えば、「よしわかった。ここから 200km 先にある」と連れていってくれた。未舗装道路を時速 100km 以上で飛ばし、2 時間もかからずに現地に着いたものだった。アルバイトの道路工事の警備員が車にはねられる例が多いという恐ろしい話をしながら。

今回はオーストラリアほどではなかったが、久しぶりの悪路を体験した。伐採木を運ぶ巨大なトレーラー以外に対向車はほとんど来ないため、道路のどこを走ってもよい。運転手は道のくぼみに突っ込まないように凹凸の凸部を選んで走る。トヨタ、いすず、ダイハ

ツなどの日本製四輪駆動車の独壇場である。ときどき路肩が崩れている場所がある。勢いあまってそちらへ突っ込まないか心配だったが、運転手は自信満々だった。ガソリン・スタンドにタイヤの空気圧を調整する機器が装備されていて、未舗装路を走る前に運転手は空気圧を下げていた。普通の舗装路に戻ると今度は空気圧を上げるのであった。

ヒルの吸血にはポイズン・リムーバーが効く

マリアウ・ベイシンの森林内はヤマビルが多かった。東南アジアの熱帯雨林はどこもヤマビルが多いが、以前の研修旅行で訪れたマレーシのタマン・ネガラ熱帯雨林では、私は被害に合わなかった。今回もヒルの被害は他人事だった。スパッツもせず、せいぜい帽子をかぶって首に手ぬぐいを巻く程度の予防しかしなかったのだが、今度はヒルに確実に侵入されてしまった。

3日間の調査の間に胸、背中、腰、足、親指と咬まれ、だいぶ出血した。胸をかまれた直後には、高橋孝洋さんが持参したポイズン・リムーバーでヒルの唾液を吸い出してもらったのだが、この処置はたいへんに効果があった。ポイズン・リムーバーは空の注射器のようなものである。この処置をした胸の傷だけはすぐに出血が止まり、傷跡も小さく残っただけだった。他の傷は出血が続き、かゆみも止まらず、傷痕もなかなか消えなかった。

マレーシアのヒルに関して、『マレーシア百科 動物篇』には、次のように記述されている。

“過去には医用ヒル *Hirudo medicinalis* がヨーロッパでは万病に効果のある治療法として瀉血に使われていたが、マレーシアで同様の種はマニラ・ヒル *Hirudinaria manillensis* で、湿地に普通に住み、主にバッファローに付くが、河口ワニで記録されたこともある。実際に家畜につくヒル3種(*Dinobdella ferox*, *Limnatis dissimulata*, *Limnatis maculosa*)はウマ、ウシ、バッファローの鼻や喉、ワギナで発見される。3種ともヒトに害があり、昆虫咬傷を防ぐきっちりした衣服を着ていても、ヒルにはお手あげである。

ヤマビル(*Haemadipsa* 属)はバッファロー・リーチよりは小さい。沼地に住み、乾季には隙間に隠れているが、条件が良くなると温血動物を襲いに出てくる。マレーシアでは普通で、弾性のある体をもち、ヒル特有の曲りくねった動きをする。哺乳類を襲うが、鳥や冷血動物でも記録されている。マレーシアのヤマビルは4種(*Haemadipsa zeylanica zeylanica*, *H.subagilis*, *H.sylvestris interrupta*, *H.picta*)で、湿気が多い耕作地で見られ、仕事上の大きな害となっている。

ヒルは家畜にとって血液を失わせるだけでなく、咬傷からの二次感染や、感染症の伝播もする有害生物である”。

ヒルの姿はナイフの柄や衣類の生地、カゴなどの柄のモチーフにもなっていた。

タンブナン村にて

コタキナバルの郊外、タンブナン村で、私は村の周囲を回る調査を選んだ。2011年8月7日に、キパンディ・バタフライ・ガーデンのステューブン博士が標高1200mのところ、ピーティングする私に「ハエトリグモはこんなに高いところには少ないよ。700m以下のところに行かなきゃ」と助言したからである。確かにやぶの低木をピーティングしてもあまりクモが落ちて来ない。そこで、他の研修参加者が山へ行くのにもかかわらず、私は山へ行かないことにしたのである。タンブナン村のホテル、セブン・ロッジが標高600mくらいなのだ。村にスティするひとはほかにいないため、単独行動になってしまうが、仕方が無い。ただし、ステューブンが700mを基準にした理由は自分のガーデン・ミュージアムが700mの高さにあるかららしい。

8月8日は、昼過ぎにホテルに戻って、ホテル周辺の二次林でやぶに入ってピーティングするとさっそくハエトリグモが採れた。日本にも生息するヤマトハエトリグモ属のクモである。熱帯雨林内ではピーティングする低木層が貧弱だったし、樹上性のアリも多いため、ピーティングは成果が少なかった。タンブナンでもクローカー・レンジ公園では標高が高くてもやはり成果は少なかった。やはり村の周辺の低い場所のほうがハエトリグモの採集には適当なようだ。

翌日8月9日も、タンブナン郊外で車を降り、ピーティングしながら4kmほど歩いて、タンブナン市街へ戻った。この間、村を見学したのでその印象を記録しておく。

農家の敷地は広大である

高床式の木造平屋の家が建っている。家の周辺は畑や水田であり、敷地の周囲には柵が施してある。柵は木製だったり、鉄条網だったりする。一軒の家の敷地が終わると次の家の敷地が始まる。他人の敷地のなかでピーティングするわけにはいかないので、歩いてやり過ごすことになる。一軒の農家の敷地が広い。馬や牛、ニワトリが放し飼いにされている。うっかり敷地内に踏み込むと、放し飼いの犬に吠えられる。牛の糞が歩道のあちこちに落ちていたが、強い日射しで数日で乾いてしまうようだった。

水田の苗はきちんと整列しておらず、手植えのようだった。トラクターのような機器を見なかったし、畑をクワで耕している女性もよく見かけた。もっとも資料(2009)によれば、千人当たりのトラクター台数は24.1台で、この数字はインドネシア(1.9台)やミャンマー(0.5台)、ベトナム(5.8台)と比べると決して低くはない。ちなみに日本は826.4台。

農家の規模は決して大きくはないようだが、生活はまずまずのように見えた。田舎道を歩いていると、家族が乗った乗用車が停まり、街まで乗っていくかと誘われた。路傍で採集中だったので丁重にお断りしたが、村人も穏やかな様子が伺えた。

機内食は要らない

「必要のないもの」というアンケートがあったら、私はまずだいいちに機内食をあげたい。機内食がまずいというわけではない。各航空会社の機内食を採点したり、楽しみにしているひともし少なくない。しかし、あえて言いたい。「機内食は要らない」と。

その理由は客室乗務員の労力がたいへんだからである。機内食の配膳と片付けにかかる時間と労力。無駄である。不安定な機内でこぼさず液体をそそいだり、渡したりする能力、なみなみならぬものである。もし機内食が無かったら、せいぜい飲み物を配るだけだ。それさえそうたやすくは無い。私はおなかの減る客は空弁を持ちこめばよいという考えである。それで何も不都合はない。鉄道の楽しみは駅弁、航空機の楽しみは空弁。それでいいではないか。食べなくていいひとは持ちこまなければいい。

だいいち羽田からボルネオまでの直行便はたった 5 時間、しかも行きは深夜である。到着は早朝。食事は不要な時間帯である。帰りにしたって午後 6 時に出て深夜 12 時には着く。搭乗前に食べるかパンでも持ち込めばそれですむ。

機内食の分だけ航空料金を下げてもらったほうがずっとよい。機内食サービスなしの代わりに格安料金で航空会社で競ってもらえないものだろうか。

参考文献

池田博明, 1989. 派手なクモ、地味なクモ. IN 梅谷献二・加藤輝代子(編)「クモのはなし I」技報堂出版.

大賀圭治監訳, 2009. 食料の世界地図 第 2 版. 丸善出版.

Rani, H.Osman., 2007. Economy, The Encyclopedia of Malaysia. Archipelago Press. 148p.

Sen, Yong Hoi., 1998. Animals, The Encyclopedia of Malaysia. Archipelago Press. 144p.